

現代ロシアにおけるヴィクトル・ツォイのイメージについて

長谷川 章

Об образах Виктора Цоя в современной России.

ХАСЭГАВА Акира

CONCEPT

Настоящая статья посвящается истории по приемам и пере-творчествам образов советской звезды рока-музыки Виктора Цоя. В современной России XXI века разные тенденции используют образы Цоя в виде своего политического сторонника. В этой статье автор рассматривает о начале первых образов этого певца в фильмах «Асса» С. Соловьева и «Игла» Р. Нугманова, одновременно сравнивая героя в фильме «Брат» А. Балабанова, чью роль играл актер С. Бодров-младший, погибший в катастрофе в молодом возрасте, как Цой.

キーワード: ソビエト・ロック, ロシア映画史, 現代ロシア・ポップカルチャー

Ключевые слова: советская рок-музыка, история русского кинематографа, поп-культура современной России

1. いまツォイをとりあげる理由

ヴィクトル・ツォイ (1962-1990) は1980年代のソ連で高い人気を博した, 朝鮮系 (父が朝鮮人, 母がロシア人) のロック・シンガーである。ペレストロイカ期前のレニングラードのアンダーグラウンドな音楽界でデビューし, 自身がヴォーカルを務めるバンド<キノ>(映画) は若者に浸透していく。ペレストロイカ期になると公認文化と非公認文化の壁が取り払われ, 彼の曲は大ヒットとなる。音楽だけではなく, 彼は映画『アッサ (Асса)』(セルゲイ・ソロヴィヨフ監督) (1987), 『僕の無事を祈ってくれ (Игла)』(ラシド・ヌグマノフ監督) (1988) にも出演した。この2本の映画は, それまでの非公認文化がどのように受容されてきたか, 新時代にどのような視点で文化全体に取り込まれたかを知る上で, 映画史的にも貴重な作品となっている。

しかし, 人気絶頂の中, ツォイは1990年8月15日にみずから運転する自動車の事故で, わずか28歳で突然亡くなってしまふ。ファンの嘆きは大きく, 例えば, モスクワではアルパート通り近くの施設の煉瓦塀がツォイ哀悼の場所とされ, 様々なメッセージがペンキで書き込まれることになった (この行動はツォイの死から30年経った現在もつづけられている)。スターの夭折というのはどこの国でも大きな社会現象となるものだが, ツォイの場合, その余波はむしろ現代になって顕著であり, 没後30年のあたりで, 2本の映画作品が作られてもいる。キリル・セレブレンニコフ監督『LETO- レト-

(Лето)』(2018) はツォイのデビューに向けた一夏の体験を描き, アレクセイ・ウチーチュリ監督『ツォイ (Цой)』(2020) はツォイの車が正面衝突してしまったバスの運転手を主人公にし, そこからツォイの存在を逆照射しようとしているようだ。

このように現代ロシアではツォイは単に脈々と記憶され続けるだけでなく, 映画化や別のミュージシャンによるカバー化, それに基づくプロモーション・ビデオの制作によって, 彼のイメージが次々と再創造されている。しかも, そこにはことなる政治的文脈への位置づけも行われているのだ。

例えば, ツォイのミュージシャン・デビューの一夏を描いた上述の『LETO』の監督・演出家のセレブレンニコフは現政権とは馴染まないリベラルな立場を保持しているが, 2018年に自らの演劇活動に対する政府の補助金を不正に利用したとして告発され, 20年に執行猶予付きの判決が出ている (本人は容疑を否定)。ツォイについて清新な映画を製作し, 18年カンヌ映画祭で音楽賞を受賞するほど世界に認められた監督がこのような露骨に政治的な事態に巻きこまれてしまったのである。

一方で, ツォイの歌「カッコウ (Кукушка)」(1990) は別の展開をたどった。第二次大戦舞台の映画『ロシアン・スナイパー (Битва за Севастополь)』(セルゲイ・モクリツキー監督) (2015) で, 女性歌手ポリナ・ガガーリナがテーマ曲としてカバーし, 大ヒットとなったのである。この映画の舞台は, 独ソ戦前半の激戦地クリミア

半島のセヴァストーポリであるが、その内容は、映画公開の前年、ロシアがウクライナ領だったクリミアを強制的に併合した事実を間接的に是認するようなものであった。ロシア人たちがいかに死闘を繰り広げ「祖国」の土地を守ろうとしたのかという側面ばかりが強調されていたのである。

このようにほとんど対立する政治的な文脈の中に置かれている現代のツォイのイメージだが、それはどのような社会的要因と結びついて、上記のような展開をみることになったのだろうか。このテーマを連続した研究課題とするにあたり、最初の論文となる本稿では、しかしながら、現代の政治的・文化的文脈から直接説き起こすことはしない¹。そのかわり、まず、生前のツォイが、人気を博したペレストロイカ期に、どんな文化的文脈におかれたのか、それがソ連崩壊後の1990年代や21世紀初めにどうひきつがれることになったかを主眼におき、現代への展開の基本的知識となる部分を整理しておきたい。

2. ソ連映画における「不良少年」像とツォイ

筆者はかつて「さすらう少年たち—ソ連=ロシア映画における「不良少年」像—」で、社会的規範から逸脱した少年たち（浮浪児を含む）がソ連映画の中でどのように形象化されてきたかを論じた²。例えば、トーキー初期の『人生案内（Путевка в жизнь）』（ニコライ・エック監督）（1931）では、革命直後、生きるためにスリなどの犯罪を重ねる浮浪児たちが教育学者マカレンコの思想を受けた矯正コロニーで働く喜びを知り更生していく（この要約では一方的な人格改造のように映るが、決してそれだけの映画ではない）。もっと時代を下った『シュキート共和国（Республика ШКИД）』（ゲンナージー・ポロカ監督）（1966）も同様の舞台設定であるが、雪解け期の息吹がまだ残っている時代のみずみずしさで、浮浪児だった少年たちの人間的成長を描いていく。こうした時期までのソ連映画では社会的規範から逸脱した子どもは「学校」という集団の教育の中で立ち直ることが期待されていた。

しかし、ブレジネフ期末期（ツォイの非公認音楽界への登場時）あたりから、集団教育による更生という理想よりも現実の実態を見つめ直そうという姿勢が映画に現れてくる。息詰まるような社会の停滞感は社会主義的教育の理想への信頼を失わせたのだが、映画人たちは、自

由にものと言えない中でも、何とか現実を直視した作品を作ろうとしたのである。『パツァヌィー（Пацаны）』（ディナラ・アサーノワ監督）（1983）のように少年更生キャンプを舞台としながら、問題は親たちのアルコール依存症や育児放棄の方にあることを告発した作品もこの時期に生まれたのである。

ペレストロイカ期の到来は、ツォイの自由な活動を可能にしたと同時に、社会規範から外れた少年たちの存在を映画でこれまでにないほど全面的に表現することができるようにもなった。セルゲイ・ボドロフ監督『自由はパラダイス（СЭР（Свобода – это рай））』（1989）では、実際に少年院にいた13歳の少年を起用し、矯正施設を脱走し、監獄にいる父に会いに行く孤独な旅をひりつくようなタッチで描いている。

さらに同年のヴィタリー・カネフスキー『動くな、死ね、甦れ！（Замри-умри-воскресни!）』は画期的作品となった。レニングラードの街中で見かけた、やはり13歳の少年を主演に据え、スターリン時代の不良少年の彷徨を描いた本作は、カンヌ映画祭でカメラ・ドール賞を受賞することとなった。両作の共通した特徴は、もはや集団的な教育施設に信頼をおいていないことである。彼らは少年院や学校からドロップアウトし、教育施設の外側でどこにも所属せず一人で生きようとするときにこそ、真の自分を取り戻しているかのようである。ソ連崩壊までの混乱の加速化とパラレルに、ここではアナキーなほどに自由への希求がうたわれるのだ（なお、『動くな、死ね、甦れ！』の主人公は、これまで公的メディアに出ることのなかった、闇社会起源のさまざまな俗謡を路上で口ずさむ。許されなかった歌を路上で自由に歌うという行為も、自由への希求の一つの形と言えるだろう）。

ツォイの映画への登場は、こうした不良少年ものの転換と同時期に行われた。ツォイは1987年と翌年公開の2本の映画に出演する（ツォイの劇映画出演はこの2本だけである）。最初の『アッサ』は、ブレジネフ期の地方都市で非公認の音楽活動を追求する青年（ツォイではない）がマフィアの愛人に恋心を抱くようになるが、殺害されてしまうという悲劇的な物語である。主人公はレストラン・バンドに勤めながら、ヴォーカルとして警察などの監視の目をかいくぐり、客の求めに応じてロックを演奏していた。彼の亡き後に、映画の最後ではツォイが出演し、バンドで悲劇に倒れた主人公の後を継ぐ。ツォ

1 本論文は2020年度科学研究費助成事業（基盤研究（C）一般）「現代ロシアにおけるソビエト・ポップカルチャーの再解釈・文脈改変の事例研究」（課題番号20K00121）の研究成果の一部である。

2 長谷川章「さすらう少年たち—ソ連—ロシア映画における「不良少年」像—」（『秋田大学教育文化学部研究紀要 人文科学・社会科学部門』62, 2007年、本稿第2章は上記論文の要点を大幅に改稿したものである）。

イたちがリハーサルで演奏し始めると、やがてカメラはパンし、ペレストロイカ期野外コンサートでの現実の演奏シーンに繋がられていく。ロックが非公認からついに公の世界へ何はばかることなく登場したことを讃えて映画は終わるのである。

ここでのツォイは主人公の求道的精神を受け継ぎ、ロック音楽公認化の時代へと飛躍していく。それは、アンダーグラウンドで共に活動していたミュージシャンへの連帯を表すものとなっている。また、それだけではなく、同時にフィクションの段階を抜け、最後にツォイ本人として登場することで、自らがロック公認化の象徴ともなったと言える。これは、ソビエト・ロックにとって画期的な瞬間となったが、しかし、上述のような不良少年もの映画との関連は、ここではあまり直接的には感じられない。ツォイも映画の青年もすでに18歳以上で成人に達しているせいもあるだろうが、他方、『自由はパラダイス』や『動くな、死ぬ、甦れ!』の少年たちが聞く音楽とは直接リンクしないためである。それを考慮した場合、ツォイの出演作でより注目すべきは、1988年の主演作『僕の無事を祈ってくれ』（ラシド・ヌグマノフ監督）の方であろう。

カザフスタン出身のヌグマノフ監督の映画は、レニングラードっ子として育ったツォイに、自らの朝鮮系の出自を意識させるものとなった。ツォイの父はカザフスタン生まれで、朝鮮系である一族が極東からこの地に移ったのは、極東で日本に協力することを恐れたスターリンによる朝鮮人強制移住政策のためだった（まったく根拠のない政策だった）。ツォイは映画の撮影をきっかけに、現地の朝鮮系コミュニティと親しむことができた³とされる。

『僕の無事を祈ってくれ』は、ツォイ演じる主人公がモスクワからカザフスタンの故郷の町に戻るところから始まる。主人公は元恋人に会うが、彼女は麻薬密売組織に引き込まれ麻薬中毒に冒されていた。いったんは彼女を町の外へ連れ出し健康を取り戻させようとするが、密売組織が彼女の復帰を妨害する。ついに主人公は組織と対決する。しかし、最後には雪の中、一味にナイフで刺され死を暗示しながら映画は終わっていく。

あらすじをこうまとめるといかにもシリアスな内容に思われるだろうが、映画の魅力はそうした雰囲気吹き飛ばすようなサブカルチャー的感覚にみちている。ソ連のテレビ番組のテーマ音楽や効果音がパロディ的に引用され、アクションシーンは香港映画のようでもある。決

して語り口のうまい映画ではないが、ツォイの個性を引き出し魅力あふれた演技をさせている。

この映画とこれまでの不良少年ものを対照させたとき、やはり路上を彷徨する少年たちと、サブカルチャーの文脈の中で造形されたツォイ演じるアウトロー的ヒーロー像は一致しないように映るかもしれない。しかし、『僕の無事を祈ってくれ』の主人公は社会的規範から外れる形でこれまで生きてきたことが示唆され（映画冒頭では列車に乗っても料金を払わず、公衆電話をただでかける方法を披露する）、悪童めいた出自が不良少年たちと重なるものであることが明らかになる。逆に言えば、少年たちからはツォイのヒーロー像は、大人になった時の自分のイメージにつながっていくのである。

ツォイはペレストロイカ期、音楽シーンで一大スターにまで上り詰めるが、そのイメージの形成には彼が出演した2本の映画によってつくられた部分も大きいと思われる。『アッサ』では、非公認時代のロックの求道者たちの精神を引き継ぐ者として描かれた。ここではツォイこそが非公認期からのロックの代表者とするイメージが形成されたのである。当時、他にもソビエト・ロックの代表者は何人もいたはずであるが、この映画のツォイのイメージと最後に歌われる「変革を！（Перемен!）」は、後に彼のカリスマ性を示すアイコンとして多用されるようになる。

一方、『僕の無事を祈ってくれ』では、不良少年たちの未来への期待が投影された像として示されることで、ソ連映画の不良少年ものの歴史と分かち難く結びつくようになる。このことは、ソ連崩壊後、次に述べるように、もう一人のヒーローを演じたセルゲイ・ボドロフ Jr.（『自由はパラダイス』監督の息子）とツォイの関係にも波及していくのである。

3. 1990年代のツォイ受容

『アッサ』と『僕の無事を祈ってくれ』の2本の映画に出演し、音楽シーン以外にも大きな可能性を示したツォイだったが、1990年8月15日に突然交通事故のため亡くなってしまった。そして、翌年の12月25日をもってソ連は解体される。それ以降、ツォイの受容と再創造の歴史は、本人の活動歴の3倍以上の時間にわたって、生前の彼が思ってもみなかった多様な方向に分岐していくことになる。

その最初の表れは、ツォイ急死直後のファンの行動で

3 沼野充義『モスクワ -- ペテルブルグ縦横記』（岩波書店、1995年）。この本は前からページ番号を振られたモスクワ編と後ろから番号を振られたペテルブルグ編からなるが、後者のp.8にもとづく。

4 Bushnell, John. "Paranoid Graffiti at Execution Wall" in "Consuming Russia: Popular Culture, Sex, and Society Since Gorbachev" (ed. by Adele Marie Barker, Duke University press, 2001. p.409, 410.)

ある⁴。モスクワの熱狂的なファンが、ペレストロイカ期の精神に呼応するかのように開放的になっていたアルバイト通り脇のクリヴォアルバーツキイ小路の煉瓦塀に「ツォイは生きている」などのメッセージをペンキで殴り書きし始めたのである。この壁をめぐるのは市当局と対立したり、書かれた文字を抹消されたこともあったが、現在でも30年にわたってファンによるメッセージの書き込みは続き、「ツォイの壁」と呼ばれる観光名所にもなっている。ツォイが活躍したレニングラード（現ペテルブルグ）ではなく、モスクワでこの壁が生まれた理由については今後の考察の対象としたいが、その後のツォイのイメージの様々な再創造とパラレルに、この壁が事故死直後のファンの悲嘆を永久に記憶に留めるように存在し続けてきた事実は強調しておくべきだろう。

ソ連崩壊後の1990年代、混迷するロシアでは資本主義化した映画産業がバイオレンス映画など、それまでソ連で未発達だったジャンルの作品をつくりだす。その中で、崩壊後最大のヒット作と呼ばれるようになったのがアレクセイ・バラバノフ監督『ロシアン・ブラザー (Брат)』(1997)である。主人公役にはセルゲイ・ボドロフ監督の息子ボドロフ Jr. (親子で同姓同名のため息子の方を Jr. とする) が起用された。『ロシアン・ブラザー』の主人公はチェチェン紛争から帰還した若者で、停滞した故郷に見切りをつけ、ペテルブルグに出ていく。そこで地元の市場を牛耳るチェチェン・マフィアの不正に対して立ち上がり、マフィアを倒すというのがあらすじである。チェチェンやユダヤ系の人々への差別的なセリフもあり、全体として映画の演出は意図的に排外主義的カタルシス効果を狙ったものと言え、決して手放して評価はできない。しかし、主演のボドロフ Jr. の童顔で甘い容貌は観客に親しみを持たれるものだった。ここでの主人公はツォイが『僕の無事を祈ってくれ』で演じた主人公の発展上にあり、やはり年若い少年たちの憧れるアウトロー像を継承しているのである。また、ボドロフ Jr. も父親も祖先の一部にブリヤート人などがおり、ツォイ同様アジア系の血を引いていることになるのである(父親が2007年に浅野忠信主演で『モンゴル (Монгол)』を監督したのもそのような先祖への関心から来ているのだろう)。

『ロシアン・ブラザー』は大ヒットとなり、2000年には同じ監督、主演で続編もつくられる。しかし、ボドロフ Jr. は自ら監督業に乗り出し、初監督作『シスターズ (Сестры)』(2000)を完成させる。2人の少女(13歳と8歳の異父姉妹)がマフィアに追われて逃亡する、この映画は、ロシアの不良少年ものの伝統の中で珍しく少

女を主人公としている。『ロシアン・ブラザー』の民族差別的言辞とは違い、『シスターズ』で逃亡する少女は非ロシア系の人々(ロマ、中央アジア出身者)によって助けられる。また、姉の方はツォイの大ファンで、妹の不注意をたしなめる際に、「ツォイは、あんたみたい子が道路に飛び出して来て、それを避けようとして死んだのよ」と話す(もちろん、そのような事実はないのだが)。

1990年に亡くなったスターへの熱狂を2000年当時13歳の少女がリアルタイムで記憶しているとは思えない。しかし、ここであえてツォイについて言及することで、ボドロフ Jr. が『僕の無事を祈ってくれ』のアウトロー像を継承するだけではなく、ツォイの音楽をも引き継ごうとしたとみることができる。やがて、『シスターズ』を完成させたボドロフ Jr. は次作『連絡兵 (Связной)』の撮影に取りかかる。自分で監督・主演を担当しながら、『ロシアン・ブラザー』の排外主義を乗り越えるかのように、ここでは紛争地を舞台にコーカサス系とロシア人の友情を描くことを予定していた。これは、『ロシアン・ブラザー』の前年1996年に主演俳優として成功した『コーカサスの虜』(父親のボドロフが監督)と舞台設定が似ており、民族対立の克服に彼なりに誠実に取り組もうとしたと見ることができる。しかし、2002年9月20日、ロケ地の北オセチアで発生した雪崩のため、他の撮影クルーとともに彼は30歳の若さで亡くなってしまった⁵。

4. 21世紀のツォイの受容と再創造にむけて

ともに痛ましい事故で夭折したツォイとボドロフ Jr. であるが、両者はいくつかの共通点がある。二人はともにアウトロー的ヒーローとして映画で主演し注目を集めた。ソビエト映画的な不良少年ものが集団の中での再生から、たった一人で生きていく道を選ぶ方に舵を切ったのと同じ時期に、その少年たちが自己を投影する未来像として二人のイメージは登場してきた(もちろん、実際の不良少年がこの未来像にたどりつけたわけではない)。

また、両者はともにアジア的出自をもつ。ソ連崩壊期・崩壊後はショーヴィニズムが不気味に浸透していった時代だった。こうした中、アジア系の両者が人気を博すことは、民族的排外主義の勢いを一部とどめる効果もあっただろう。さらには、ボドロフ Jr. は、唯一の監督作『シスターズ』のように、ツォイの記憶を部分的に受け継ぎながら、単純なアウトロー像からアジア系などの社会のマイノリティとの連帯を図るような視点も打ち出していく。つづく『連絡兵』はロシア内の民族間の断絶を克服する可能性を示してくれたかもしれない。俳優だけ

5 「Ледник Смерти» Известия от 23/IX/2002. URL: <https://iz.ru/news/267500> (последний доступ от 21/XII/2020)

ではなく監督としての成長も事故で絶たれてしまったボドロフ Jr. だが、彼の死と前後して 21 世紀に強権的なパターナリズムがロシアに広がっていくことを考えると、ロシアの映画界にとっても大きな損失と覚えてくるのである。

ただ、ここで改めて確認しておかなければならないが、ボドロフ Jr. は現在のロシアで決して忘れられた存在ではない。女性シンガー、モネトチカは 2018 年に新曲「90 年代」をリリースするが、プロモーション・ビデオ（ミハイル・イドフ監督・脚本）が YouTube で公開されると一躍注目を集める⁶。このミュージック・クリップは『ロシアン・ブラザー』のボドロフ Jr. の逃走シーンをパロディ精神あふれるタッチでモネトチカ本人が演じてみたものである。荒廃した 90 年代を現代がどのようにとらえなおしているかという点で非常に興味深い。

しかし、このようにボドロフ Jr. のイメージが新たに作りかえられることは比較的珍しいように思われる。対して、ツォイの方はどうだろうか。冒頭で述べたようにツォイに対する近年の過剰なくらいの注目は、彼がまずミュージシャンであることが大きい。ボドロフ Jr. は映画俳優であり、彼の記憶からあらたにイメージを再創造するには、限られた活動年数の映画作品に範囲が絞られる。また、監督作も 1 本だけである。映画作品本体や

その一部をリメイクするのは、現代からの関心がよほど高く、再映画化にあたっての需要がある場合である。一方で、ツォイの歌はそれよりも気軽にカバーされうる。歌詞はそのままに他のミュージシャンがメロディやリズムに微妙なアレンジを加えていくことで、原曲から多様で豊かなニュアンスが生まれていく。その点を比較すると、ツォイの方が影響力を後世に及ぼす上で有利な条件が用意されていたと言える。

しかし、近年盛んなツォイのイメージの再創造は、彼を慕うミュージシャンやファンたちの行為の延長上からそのまま生まれたとは必ずしも言えない部分がある。モスクワのツォイの壁にはメッセージが書き込まれつづけたが、そのようなファンだけの親密な場所で生まれた原型的イメージが別方向に転用された可能性は注視しなければならない。例えば、ペレストロイカ期の映画『アッサ』を締めくくる、ツォイの代表曲「変化を！（Перемен!）」が、やがてはプーチン政権へのプロテスト運動を象徴する歌として使われるようになるのである。ただ、本論の目的は、まず近年のツォイの様々なイメージの再創造の前提となった経緯を整理することにある。その後のイメージ転用の具体的な展開については次の段階として調査・論考を進めていきたい。

6 «Новый клип Монеточки “90-е” за сутки посмотрели более 860 тысяч человек» РИА Новости от 22/VIII/2018. URL: <https://ria.ru/20180822/1527013904.html> (последний доступ от 21/XII/2020)